

2014. 10.27

「悔い改める」という訳語の脆弱性

ベレーシート

●イエシュアが公生涯で最初に語った言葉は「悔い改めなさい。天の御国は近づいたから。」(マタイ 4:17)でした。ギリシア語原文では「悔い改め続けなさい(命令形、現在)。なぜなら、天の御国が近づいたからです。」となっています。「天の御国」の実体がなんであるかを知るためにも、はじまりの呼びかけは「悔い改める」ことなのです。ですから、「悔い改める」というヘブル語の「シューヴ」、それがギリシア語では「メタノエオー」という言葉に対する理解はきわめて重要なのです。

●訳語の「悔い改める」の定義をいろいろな辞典で調べてみましょう。

Web 上にある辞典では、以下のような定義(説明)になっています。

- ①自分の心を変えること。
- ②行動の変化を伴う心の変化のこと。
- ③自らの罪を懺悔して、神にゆるしを願うこと。
- ④過去の過ちを反省して心がけを変えること。

●私たちも習慣的に、「罪を悔い改めて」とか、「罪を反省して」といった表現を無意識に使ったことがあるかもしれせん。ところが、「悔い改める」と訳されている原語には上記で示したような意味はないのです。そのことを新約聖書と旧約聖書から検証してみたいと思います。

1. 訳語「悔い改める」の検証

検証 I

【新約聖書の場合】

●イエシュアの公生涯における宣教で最初に口から出たことばは、ギリシア語の「メタノエオー」(μετανοέω)の命令形が使われています。「メタノエオー」(μετανοέω)は、本来、「心を変える」「後悔する」「心を入れ替える」「改心する」「思い直す」という意味のことばですが、そのことばを用いて、「神に立ち返る」ことを表わそうとしています。新約聖書で動詞の「メタノエオー」(μετανοέω)は 34 回使われています。新改訳改訂 3 版で引用します。

- ①「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」(マタイ 3:2、3:17)
- ②「それから、イエスは、数々の力あるわざの行われた町々が悔い改めなかったので、責め始められた。」(マタイ 11:20)
- ③「ああコラジン。ああベツサイダ。おまえたちのうちで行われた力あるわざが、もしもツロとシドンで行われたのだったら、彼らはどうの昔に荒布をまとい、灰をかぶって悔い改めていたことだろう。」(マタイ 11:21、ルカ 10:13)
- ④「二ネベの人々が、さばきのときに、今の時代の人々とともに立って、この人々を罪に定めます。なぜなら、二ネベの人々

HEBREW MIDRASH No. 2

はヨナの説教で悔い改めたからです。・・」(マタイ 12:41、ルカ 11:32)

- ⑤「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ 1:15)
- ⑥「こうして十二人が出て行き、悔い改めを説き広め、」(マルコ 6:12)
- ⑦「そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」(ルカ 13:3,5)
- ⑧「・・ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にある。」(ルカ 15:7)
- ⑨「・・ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」(ルカ 15:10)
- ⑩「『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』」(ルカ 16:30)
- ⑪「気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。」(ルカ 17:3)
- ⑫「かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」(ルカ 17:4)
- ⑬「ペテロは彼らに答えた。『悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、・・』」(使徒 2:38)
- ⑭「そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。」(使 3:19)
- ⑮「だから、この悪事を(ἀπὸ)悔い改めて、主に祈りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません。」(使 8:22)
- ⑯「神は、・・・今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。」(使 17:30)
- ⑰「ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣伝伝えて来たのです。」(使 26:20)
- ⑱「・・そして私は、前から罪を犯していて、その行った汚れと不品行と好色を(ἐπι)悔い改めない多くの人たちのために、嘆くようなことにはならないでしょうか。」(II コリ 12:21)
- ⑲「黙 2:5 それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」(黙 2:5)
- ⑳「だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。」(黙 2:16)
- 21「わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は不品行を(ἐκ)悔い改めようとしなさい。」(黙 2:21)
- 22「だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。」(黙 3:3)
- 23「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。」(黙 3:19)
- 24「これらの災害によって殺されずに残った人々は、その手のわざを(ἐκ)悔い改めないで、」(黙 9:20)
- 25「その殺人や、魔術や、不品行や、盗みを(ἐκ)悔い改めなかった。」(黙 9:21)
- 26「こうして、人々は激しい炎熱によって焼かれた。しかも、彼らは、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神をあがめることをしなかった。」(黙 16:9)
- 27「・・その苦しみと、はれものとのゆえに、天の神に対してけがしごとを言い、自分の行いを(ἐκ)悔い改めようとしなかった。」(黙示 16:11)

●以上、「悔い改める」という動詞が使われている箇所を引用しましたが、問題とするところは黄色い部分です。そこには、「悔い改めて」の目的語「～を」がついて訳されています。ところが原文を調べると分かるように、目的語を示す構文とはなっておらず、そこには「～から」を意味する前置詞の「エク」(ἐκ)があります。つまり、

ある状況から神に立ち返ることを示唆する表現となっていることが分かります。但し、使徒 8 章 22 節は「～から」を意味する前置詞「アポ」(ἀπό)が使われ、Ⅱコリント 12 章 21 節の場合も理由を表わす「エピ」(ἐπί)が与格で使われています。従って、すべて「悔い改める」の目的語としては使われていないということが分かります。

●使徒 8 章 22 節の「悪事を悔い改めて」は、「悪事から(悪事から離れて)、神に立ち返り」というのが正しい意味と考えられます。他の黄色い部分も、すべて「～の状況や環境、あるいは、～の行為から離れて、神に向き直り、神に立ち返る」と訳すべきで、「悪事を悔い改め」、「悪事を反省して」ということにはならないのです。神への方向性が明確に示せないところに「悔い改め」という訳語の脆弱性があります。

検証Ⅱ

【旧約聖書の場合】

●「悔い改める」の訳のヘブル語は「シューヴ」(שׁוּב)ですが、本来の意味は、「神に立ち返る(立ち帰る)」です。あるいは「心を神に向ける、向け直す」です。ギリシア語の「メタノエオー」はヘブル語の訳語であり、ヘブル語の「シューヴ」がその意味の本源です。ですから、この「シューヴ」の意味を深く研究する必要があります。それはまた後で、取り上げたいと思いますが、まずは、旧約聖書で「罪を悔い改める」というニュアンスで訳されている 3 つの箇所を、原文で検証してみたいと思います。

(1) 【新改訳改訂第 3 版】エゼキエル書 18 章 28 節

彼は反省して、自分のすべてのそむきの罪を悔い改めたのだから、彼は必ず生き、死ぬことはない。

●新改訳は動詞の「悔い改めた」の前に、「そむきの罪を」目的格として訳しています。

アシェル	ペシャーアーヴ	ミツコル	ヴァッヤーシャーヴ	ヴァッヤーショーヴ	ヴァイルエ
אֲשֶׁר	מִכָּל-פְּשָׁעָיו	מִן	[וַיָּשׁוּב]	(וַיָּשׁוּב)	וַיִּרְאֶה
(接続詞)	(前置詞)	(前置詞)	そして立ち返る	彼は立ち返り	※
～したのだから	彼のすべての	～から			「ラーアー」は「見る」という意味ですが、岩波訳は「彼が畏れを抱き」と訳しています。
	背きの罪				

●ここで重要なことは、原文では、新改訳のように「そむきの罪を」ではなく、「そむきの罪から」となっていることです。また、「シューヴ」の動詞が重ねられているのは、ヘブル語特有の強調表現です。神に立ち返ることが強調されているのです。にもかかわらず、口語訳の「彼は省みて、その犯したすべてのとがを離れたのだから必ず生きる。死ぬことはない。」は、すべてのとがを離れることが強調されて、神に立ち返ることが不明瞭な訳となっています。新共同訳の「彼は悔い改めて、自分の行ったすべての背きから離れたのだから、必ず生きる。死ぬことはない。」とあり、悔い改めが、あたかも背きから離れることであるかのように受け取られる訳になっています。

●エゼキエル書18章の強調点は32節にあるように、「悔い改めて、生きよ。」という主の御告げです。これまで自分がしてきた背きの罪を反省することではなく、その罪の支配から、神に立ち返り、立ち返って生きることなのです。

(2) 【新改訳改訂第3版】キゼキエル書 33 章 14 節

わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ』と言っても、もし彼が自分の罪を悔い改め、公義と正義とを行い、

●この箇所も、悔い改めの目的語として「自分の罪を」と訳されています。しかし、ここも「自分の罪を」ではなく、「自分の罪から神に立ち返る」と理解すべきです。原文も、以下のように記されています。

メーハッタートー מִחַטָּאתוֹ	ヴェシャーヴ וְשָׁב
彼の自分の罪	神に立ち返る
~から	(前置詞)מִן

●このような例は、エゼキエル書 3 章 19 節、エレミヤ書 15 章 7 節、ゼカリヤ書 1 章 4 節にも見られます。

- ①エゼキエル書 3 章 19 節「もしあなたがたが悪者に警告を与えても、彼がその悪を(מִן)悔い改めず、・・・」
- ②エレミヤ書 15 章 7 節「・・・彼らが行いを(מִן)悔い改めなかったからだ。」
- ③ゼカリヤ書 1 章 4 節「・・・あなたがたの悪の道から立ち返り、あなたがたの悪いわざを(מִן)悔い改めよ。」

●③のゼカリヤ書の場合、ここでは動詞は「シューヴ」の命令形が一つしかなく、その動詞に「悪の道から立ち返り」「悪いわざを悔い改めよ」と訳して言います。つまり後半は動詞が省略されています。新改訳では「悪の道から(מִן)立ち返り」と訳しているにもかかわらず、後半では「悪いわざを(מִן)悔い改めよ」と訳しています。ここは同義的パラレリズムで書かれているのですから、「悪の道から立ち返り、悪いわざから立ち返れ」と訳すべきです。「立ち返る」方向は常に「神」です。ただし、一つの例外があります。それはイザヤ書 59 章 20 節です。そこには「~から」を意味する「ミン」がありません。そこを次に見てみましょう。

(3) 【新改訳改訂第3版】イザヤ書 59 章 20 節

「しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中のそむきの罪を悔い改める者のところに来る。」—【主】の御告げ—

●ここにも「そむきの罪を悔い改める」とあり、「そむきの罪」が目的語のように訳されています。この部分を原文で見ると以下ようになります。

バヤアコーヴ בְּיַעֲקֹב	ペシャ פְּשָׁע	ウールシャーヴェー וְלִשְׁבִי
前	前・接	
ヤコブの中の	そむきの罪	「シューヴ」の分詞で「神に立ち返る者」のところに

●ここには「～から」を意味する前置詞の「ミン」(מִן)はありません。しかし、「シューヴ」(שׁוּב)そのものが、「神に立ち返る」と訳すならば、前置詞がなくても、おのずと「～から神に」という方向性を有しているので、「そむきの罪を」ではなく、「そむきの罪から」神へ立ち返ると訳することができるのです。

●罪は、私たちの力で処理できるようなものではありません。どんなに深く反省したところで、解決の道はありません。ただ、すでに神が解決を用意して下さったので、神は背きの罪から神に立ち返る者としなければ、意味をなさなくなるのです。神に向きを変え、神に立ち返ることによってのみ、そむきの罪の支配から解放されていくことができるのです。

●そもそも、「シューヴ」(שׁוּב)を「悔い改める」と訳したことが混乱のもとになっていると考えます。「罪を悔い改める」という聖書のことばは本来ないのです。「シューヴ」というヘブル動詞の意味からすると、「**罪を悔い改めよ**」という表現は確かにおかしいのです。したがって、恐れることなく、「悔い改める」という訳語を使わず、罪から、罪の中から、「神に立ち返る」と訳すならば、すべてが解決します。

●しかし、「シューヴ」の概念を「神に立ち返る」というだけで終わらせるのは、実は中途半端です。その言葉に連動するさらなる深い意味が隠されているからです。そしてそれが「シューヴ」の持っている本当の意味だと信じます。そのことを最後にふれたいと思います。

3. 「シューヴ」(שׁוּב)は単に神に立ち返るだけでは終わらない

●前回(第一回)の「ヘブル・ミドウラーシュ例会」で、二根字の出会いとその秘密について取り上げました。有名な詩篇23篇の最後の節にこの詩篇の結論が記されています。多くの聖書が「私は・・・主の家に住む」(I will dwell)と訳される中で、新共同訳だけが「主の家にわたしは帰り、そこにとどまるであろう。」と訳されているのです。なぜ、そのような訳になるのか私には不思議でした。原文では動詞は一つしかありません。しかし新共同訳ではあたかも二つの動詞があるように訳されているのです。一つは「帰り」(主に立ち返る)と、もう一つは



「とどまる」(主の家に住む)という意味で訳されているのです。そのことを知ったとき、私は「ズル訳」だと思いました。しかし、今になってみると、この訳こそ、真の「悔い改め」、「神に向き直る」「神に立ち帰る」の真の意味が込められた翻訳だと思うようになりました。

●詩篇23篇の結論としての動詞は、「シューヴ」(שׁוּב)とも、「ヤーシャヴ」(יָשַׁב)とも解釈できるのです。そして共通する語根は【שׁוּב】です。この語根の周辺にある語彙をつなぎ合わせていくと、「神に立ち返る」という出来事がそれだけにとどまらず、新たなドラマのはじまりとなるのです。「シューヴ」(שׁוּב)はそのドラマを形づくる重要なプロセスの一部として、他の出来事との**連鎖性をもった語彙**だということに気づかされるのです。つまり、「シューヴ」の概念はその流れの中で理解される必要があるのです。そのことを知る時、イエシュアが語られた「神に立ち返りなさい。天の御国は近づいたから」ということばがいかに重いことばであるかに驚

かされます。

●再度、語根【נש】の周辺にある語彙を見てみたいと思います。

語根がנשであるならば、そこからいくつかの語彙群が考えられます。一つ目の動詞の「虜にする」の「シャーヴァー」(שָׁבַח)、その受動態の「虜にされる」の「ニシュバー」(נִשְׁבָּח)、そしてその名詞「虜」の「シェヴィー」(שִׁבְיָ)が、二つ目の動詞の「帰る」の「シューヴ」(שׁוּב)と連鎖することによって、捕らわれ人を帰らせて、神とのかかわりを回復することと関係してきます。神に立ち帰ることで捕らわれの状態から解放されます。そして、はじめて三つ目の動詞である「住む、とどまる、座る」の「ヤーシャヴ」(יָשַׁב)が可能となり、神と人とのかかわりが回復します。しかしこのことが実現するためには、その背景に四つ目の動詞である「ナーシャヴ」(נָשַׁב)が必要です。この「ナーシャヴ」は詩篇147篇18節に「主が・・・、ご自分の風を吹かせると、(氷を溶かして)水は流れる」とあるように、主の主権的な力を示唆しています。そして五つ目は、神との親しい愛の交わりを豊かに味わい続けるという意味での水を「汲む」の「シャーアヴ」(שָׁאַב)が考えられます。特に最後の「シャーアヴ」は、イザヤ書12章3節の「あなたがたは喜びながら救いの泉から水を汲む」という比喩的表現による終末のメシア的王国の祝福を表わしています。そこには私たちの想像をはるかに越えた、桁違いの祝福を味わうことのできる世界です。しかもそれは、メシアの地上再臨によって完全に実現します。

●「シューヴ」の概念が単に神に立ち返るだけで終わるならば、人が神を信じて洗礼を受けることで鬼の首を取ったような勝利感で終わってしまいます。しかし「シューヴ」の概念はそれだけで終わるのではなく、神に向きを変えて、神にとどまり続けることを通して、はじめてその真意が輝かされるものだということを再考する必要があります。イエシュアも弟子たちに「わたしにとどまりなさい」と言われました。なぜなら、「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」(ヨハネ15:5)。このイエシュアのことばの真意を「神に立ち返る」ことと連動させて考える必要があります。今日、多くのクリスチャンがこの「とどまる」という意味をどこまで真剣に捉えているのかが問われます。この「とどまる」ということは目に見えない領域です。しかし教会が目に見えることから、目に見えない領域に目を覚まし、教会的課題として真剣に取り組むのでなければ、教会は神にとって益となることがなく、実を結ぶこともできないのです。

●もう一度、イエシュアが語られた「悔い改めよ」、いや「神に立ち帰りなさい。」という呼びかけを重く受けとめると同時に、「天の御国(メシア王国)」についての概念をヘブル的視点から正しく理解していく必要があります。そのようにして、使徒パウロのように、神のご計画としての「御国の福音」を聖書全体から余すところなく(使徒20:27)紐解ける(論証できる)者となることができると信じます。そのために日々祈りつつ、地道に備えていきたいと願われます。

銘形 秀則